

私がなぜ現在の科目を選んだか

「血液内科」

信州大学医学部血液・腫瘍内科学教室

川上陽也

私が医師を志した最初のきっかけは、小学生の頃、手塚治虫の漫画「ブラック・ジャック」を読んだことでした。無免許の外科医ブラックジャックこと間黒男（はざま くるお）が神業のような手術で数々の患者を救うお話です。鮮やかに手術を成功させる姿や、一見ワルっぽく見えて実は人情に厚いところに、子供の頃の私は憧れたものでした。それから紆余曲折を経て、実際に医学を学び、私は今、外科医の対極のような診療科である血液内科で診療を行っています。ただ、私の中にはまだブラックジャックのマインドが残っていると思います。

有名な回で「おばあちゃん」というお話があります。いつも法外な手術料を請求するブラックジャックですが、それが患者への覚悟を問うているのだということが描かれている作品です。血液内科領域、特に造血幹細胞移植においては、疾患が治癒した後も GVHD な

私がなぜ現在の科目を選んだか

「耳鼻科」

信州大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科学教室

森健太郎

あまたある診療科のうち、生涯に渡り関わる診療科をどこにするのか、現行の研修医制度が導入されてから初期研修、後期研修を行った医師であれば必ず直面する問題です。すでに幼少期から強い意志を持って医学の道に進み希望の診療科が胸にある方、研修医終わる段階で決めれば良いかという方、千差万別で良いと思います。

私の診療選択は、クリニカルクラークシップが終了した段階でいわゆるメジャーな内科や外科という選択肢はなく、マイナー外科が肌身に合いそうだという地点から始まりました。

その後、追加の実習、研修を経て耳鼻科への入局を決めましたが、医局の雰囲気とそれを形作る人々の影響が大きかったと考えています。また、学会参加という学外活動への参加も耳鼻科が初でした。長期間仕事

どの晩期合併症を生じることがあり、終生のフォローアップが必要となります。患者にも協力していただくことが多くあり（食事や排便の記録、感染への注意など）、相当な覚悟が必要な治療です。病状説明や話し合いを重ね、我々医療従事者も患者も覚悟を決めることで、患者も含めた皆が一つのチームとなり、病気に立ち向かっていくことができます。この病気にへと相対する覚悟、その先にある患者も参加する医療というのを強く感じたのが血液内科でした。

また、血液内科では、外科のような華々しい手術こそありませんが、化学療法や放射線療法、ときには造血幹細胞移植や細胞免疫療法などの様々な治療を組み合わせ、治療を行います。たとえ病巣が全身に転移した stage IV の状態であっても、治癒を目指して治療を行うのです。全身の合併症を生じたり、白血球数がほとんど0になったりしているような極限の状態を乗り越え、悪性腫瘍が治癒するという劇的な経過は血液内科ならではのものであり、手術とは異なりましたが、私の思い描いていた鮮やかな治療というイメージと一致しました。

皆さん、もし思い出したらブラックジャックをぜひ読み返してみてください。（信大令2年卒）

として関わる以上、「自分の肌身に合うか」は非常に重要視すべき点で、自己形成に関わる職場環境としての「医局の雰囲気とそれを形作る人々の影響」も同じくらい重要です。また、そこに「学外活動への参加」というスパイスも加わったため初期研修が始まった段階で耳鼻科に入局するという選択以外はありませんでした。

耳鼻科を選択して良かった点は、耳鼻科が自科完結型であり、ある程度仕事のコントロールがしやすい点、長野県においてはやや希少な人材であり、どこの病院でも重宝されるため診療における満足感と自己肯定感が得やすい点だと考えます。やや誇張もありますが端的に言えば耳鼻科は体と心に優しい仕事だと思います。

今回の私の経験と記事がどれくらいの人目に留まり、その人の役に立つかわかりません。いずれの科にも魅力があり、楽しさ、辛さなどが混在しているものと思います。これから診療科を検討するというステージの皆様は、くれぐれも自分にとって体と心に優しい科目を選択し、自分と他人を健やかにできる選択をされることを切に願います。（信大平21年卒）